2003年を迎えて

友松靖夫*

財団法人砂防・地すべり技術センターは、1975年に設立されましたので、本年で28年目を迎えます。新宿区砂土原町生泉市ヶ谷ビルの一室で、数名のスタッフによるスタートでした。20年を経過した時点で、現在の市ヶ谷駅前の山脇ビルに移転いたしました。現在の職員数は66名になっています。

今や砂防のシンクタンクとして各方面の信頼をいただいておりますが、さらなる向上にむけて、役職員一同努力いたします。引き続き皆様方のご指導、ご支援をお願い申しあげます。

新しい年を迎えて今年は、池谷専務理事をはじめ幹部職員からのメッセージもお伝えすることにいたしました。

今年の干支(えと)は羊(ひつじ)です。中国に「羊頭狗肉」という言葉があります。羊の頭を看板にして、いかにもうまい羊の肉を売るようにみせかけて、安い犬の肉を売ることから、見せかけばかり立派で中身がそれにともなわないことにもたとえられています。

近年、日本の食品業界において、狂牛病に端を発した牛肉の偽装表示などは、まさに文字通りの羊頭狗肉であります。他の食品においても色々と偽装表示が指摘され、世間の監視の目はきわめて厳しいものになってきていますし、私達消費者にとって大変ありがたいことです。しかし、このような羊頭狗肉的な作為はひとり食品業界のみのことではないでしょう。一般的な会社経営や経済活動の中にも「羊頭狗肉」が蔓延しているように思えてなりません。

アメリカのエンロン社に代表される不正経理などは、見せかけばかりが立派で中身のともなわない会社ぐるみの「羊頭狗肉」ではなかったのでしょうか。日本においても例えば原子力発電におけるさまざまな問題を、表面的にとりつくろうことなども、広い意味での「羊頭狗肉」ではないでしょうか。こんなのは氷山の一角で色んな所で、きわめて日常茶飯事的に行われたり、「会社のため」という一言で苦悩している人達が沢山いるのではないかと心配です。

ひるがえって私達が担当しているコンサルタント業務においても、表紙ばかりが立派でも中身がともなわなければ、「羊頭狗肉」の批判をまぬがれることはできません。内容の充実をはからねばなりません。これからは人々の需要は物よりも知恵に向かうと言われています。物を売る時代から知恵を売る時代に入ってきました。紙という同じ素材の上に、どのような内容を盛り込むか、どのような知恵を出して相手のニーズに応えていくかが焦点となるでしょう。

そのためには一人ひとりが自分の知恵のさらなる集積をはからねばなりません。

仏教の世界では知恵には三種類あると言われています。即ち聞恵(モンエ)、思恵、修恵です。聞恵とは耳から聞いた知恵です。聞きかじりの知恵であり本当の知恵とは言えません。思恵とは耳から聞いたり、目から入った知恵をもう一度思いなおし、考えなおした知恵です。自分の思索の中から新しい知恵に結びつけられるか努力することも必要なことです。修恵とは、自ら行うことによって得た知恵です。技術者にとっては最も必要なことに思います。

宮本武蔵は「五輪書」で剣の奥義をきわめるには、相手の体の動きを見る「見の目」だけでは駄目で、相手の心の動きまでをも読み取る「観の目」が必要だと書いています。思恵、修恵にあたっては、何事もこの「観の目」で見すえていきたいものです。

いずれにしても、砂防・地すべり技術センターは、「羊頭狗肉」のそしりを受けることのないように、一人ひとりが研鑽をつむとともに、組織としても、人材の育成と技術力の向上に努めていきたいと思っています。

*(財)砂防・地すべり技術センター理事長